



Rainbow letter

日本周産期メンタルヘルス学会・ニュースレター

2017.4

No.9

(修正版)

<<次回学術集会開催予定>>

第14回日本周産期メンタルヘルス学会学術集会 「こころも、視る。」

日時 2017年10月28日(土)・29日(日)

場所 大分県医師会館

(〒870-8563 大分市大字駄原2892の1)

会長 佐藤 昌司

(大分県立病院総合周産期母子医療センター 所長・産科部長)

◆学会当日、別府・大分市内で「大分国際車いすマラソン大会」が開催されることになりました。宿泊施設の不足が予想されますので、ホテルの予約等、おはやめにご準備いただきますよう、よろしくお願いいたします。

魅惑の大分② 「お猿さん」



会場からタクシー10分で、お猿さん(高崎山)に会えます。お向かいの水族館(うみたまご)とペアで御計画を。

<学会事務局便り>

第3回コンセンサスガイド評価会議報告 コンセンサスガイドの作成を終えて—三つの「難産」—

この度発行された「周産期メンタルヘルス コンセンサスガイド」で、筆者らは臨床心理領域のQ&Aの解説文作成に関わらせて頂いた。コンセンサスガイドの作成には三つの「難産」があった。

第一の難産は「人」である。臨床心理のガイドは全国で活躍する専門家(相川祐里、神前裕子、松本真穂、宮良尚子の各先生と筆者)によって作成された。最初に話が出たのは2016年初頭。当初はガイドを作成する人を「推薦する」役目であった。しかし、諸般の事情で作業は難航した。意見をまとめる筆者がまさか「私たちで…」とは言い出せず、メール議論は一時停滞した。その中で、各メンバーから「私も手伝うから(筆者が)ガイドを作成せよ」との発言を頂いたことは、今思えばなによりありがたかった。折しも熊本城が崩れた頃。作業に手詰まり感をもった筆者は心を整え直す時間を経験し、ようやく決意することができた。

第二の難産は「研究」である。周産期に効果的な精神療法的対応といってもさまざまである。星の数ほどある精神療法をどうやって整理すればよいのか。無数のランダム化比較試験(RCT)をどう解釈すればよいのか。しかもわが国の精神療法のRCTはまだ少なく、海外のデータがほとんどという状況で、である。膨大な海外のガイドラインを読み込む地道な作業が長時間続いた。多忙な中で困難な作業にお付き合い頂いた4名の先生方には、改めて心から御礼申し上げる。

第三の難産は「多職種」である。聞こえのよい言葉であるが、用語や考え方の異なる職種間のコミュニケーションは容易でない。3回の評価会議では最終段階までさまざまな意見が交わされた。専門家ほど「異業種交流」の少ない世界は他に見当たらない。しかし治療とは異なる視座が歩み寄ってこそ、成功につながるはずである。本ガイドが一石を投じるきっかけとなれば幸いである。

(評議員/富田拓郎/中央大学文学部心理学専攻)

<シリーズ・委員会活動紹介>

第1回・情報関連委員会

委員会の構成員は、菊地(精神科医)、安田(精神科医)、宮田(リエゾン精神看護専門看護師)、高馬(助産師)、そして私竹内(精神科医)の5名となっています。どの委員会も共通しておりますが、全員が揃うのは年1回の学術集會会期中に限られるので、活動の大半はメールでのやりとりです。

2か月に1回、年に6回となるニュースレターの発行に向けて、日々情報交換を行っております。記事の内容については、当学会の学術集會の宣伝や報告をはじめ、関連学会や研究会の報告、診療報酬やコンセンサスガイド作成に関する情報提供など、会員の皆様に役立つ情報発信に努めています。

投稿記事や知りたい情報などについて募集しておりますので、本委員会までお寄せいただくと幸いです。また、講演会や研修会の資料について、HP上に掲載し、会員が閲覧できるようにするなどの試みも今後検討してまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

(情報関連委員会委員長・理事/竹内崇/東京医科歯科大学医学部附属病院精神科講師)



委員会メンバー(左から宮田、安田、菊地、竹内、高馬)
2016年11月20日 学術集會会場にて

((投稿記事募集!))

会員の皆様にとって有用な情報をニュースレターで取り上げていきます。詳しくは学会ウェブサイト(→QRコード、<http://pmh.jp/index.html>)または、学会事務局(mental-3@hac.mie-u.ac.jp)まで。

*企画・発行:日本周産期メンタルヘルス学会 事務局・情報関連委員会

